

## 農業環境インベントリー研究の次のステップ Next Step of Natural Resources Inventory Research

谷山一郎\*  
Ichiro Taniyama

2006年4月1日付で、農業環境インベントリーセンター長に就任しました。その前は研究企画科に3年間、それ以前は、地球環境部などで土壌に関する研究に従事してきました。土壌分類研究室の前身でもあった土壌生成研究室に在籍していたこともあり、ある意味では実家のあった村に戻ってきたという気もしております。

さて、2005年度は、農業環境技術研究所にとっても、農業環境インベントリーセンターにとっても、大きな変革な年でした。まず、理事長以下役員や幹部職員が交代し、理事長のリーダーシップのもと、研究管理や運営が少しずつ変化し始めました。また、第1期中期目標期間の最終年度に当たるため研究成果の5年分の取りまとめが行われ、その上に立って、第2期中期目標期間における中期計画の策定が始まりました。それに付随して、組織、研究所運営システム、規程類の見直しまでさまざまな改革に取り組んできました。その中で、農業環境インベントリーセンターは名称こそ変更はありませんでしたが、組織的には微生物グループが抜け、リスク指標関係者が新たに加わるとともに、研究室はなくなり、センター一本の組織となるなど大きく変わることになりました。すべては、次の段階のための環境整備であったと言えるかもしれません。

センターが発足して5年を経過し、インベントリーという言葉も随分広がってきました。インベントリーまたはインベントリという言葉インターネットで検索すると、合計67万件ヒットします。ただ、似たような言葉のデータベースが約2,000万件、アーカイブでも1,500万件であるのに比べるとまだまだ普及しているとはいえません。また、インベントリーセンターと名付けている機関は国内ではまだ当センターだけで、諸外国でも少ないようです。

それはそれとして、農業環境技術研究所のインベントリー研究としては、インベントリーの収集・整理・システムの構築・分析という基礎と平行して、インベントリー利用法の開発に力を注ぐ段階にさしかかってきたとも言えます。その現れが、農業環境リスク指標を研究する集団がセンターに加わったことです。この集団（リサーチプロジェクト）はわが国の農業環境を総合的に評価する指標、例えば土壌や水質の良否や生物多様性の評価指標を提案するための研究を行います。農業環境影響の面としての広がりまたは時間的な変化を評価する際に必要な要素としての土地利用や土壌の性質、生物の生息状況など、さまざまな自然・社会的条件をとらえることが必要となり、それを支えるインベントリー研究の重要性が増しています。

年刊誌「インベントリー」も今年5号を数えます。雑誌の性格は農業環境インベントリーセンターの部内誌としてだけでなく、全所的なセンターとしての機能を果たすべく、広く関係情報を掲載しています。今後とも、よりよい農業環境インベントリー研究のためにご支援ご鞭撻をお願いします。

---

\* 農業環境インベントリーセンター長

Director, Natural Resources Inventory Center  
インベントリー, 第5号, p1 (2006)